



されど 議員・地域活動の日々

神田 和夫

私はついに腎臓透析患者となった。一九九八年に慢性腎炎と診断されて以来、網走市内の病院に通院していた。

二〇一一年春の統一地方選挙で斜里町議会議員の再選を果たして間もない五月二日、「年内に透析開始、その準備を始める」と医師から告げられ心底落胆した。

一週間後の九日には初議会を迎え、治療を理由に当選を辞退することになれば、投票してくれた町民を裏切ることになる。年内とはいっ頃になるのか医師に聞くと、「数値の進行状況からして遅くとも二二月頃」という。悩んだ末に、支援してくれた人の期待に応え

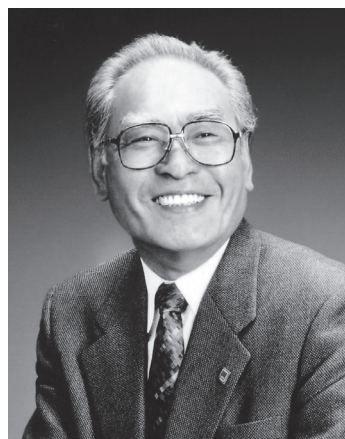
ようと思い、議会選出の監査委員も引き受け、議員としての活動は今期かぎり自身に言い聞かせ、覚悟を決めた。

そうしたなか、夏に変調をきたし、自分で車を運転して網走の病院に行き即日入院、極度の「貧血」のため輸血等の処置を受けた。様々な検査の結果、胃壁に充血痕がみつかったが、痕を焼く治療は胃潰瘍になる懸念から、自分の間投薬治療することになった。そして病状が落ち着いたところで、人工透析の準備としてシャント手術を受けた。議員の進退時期を真剣に考えはじめるとともに、議員活動を通して地域に恩返しを、と心に誓った。

秋にまた貧血のため再入院し治療。年末にかけて病状を気にしながら、議員活動の会報編集と発行作業。年が明けて正月早々の三日、会報を支援者各戸に配つているとき体調が悪くなり、途中でやめる事態に。翌四日に胃壁をレーザーで焼く手術をうけ、以降、貧血はウソのようになくなり快復した。夏の時点で焼いていたらと、内心恨み言をいう。

これで一安心と思いつながら、いつも頭のなかにつきまとうのは人工透析のことだった。同じ病院には町内の人が通院しているの、私の入院や病状は知友人、支援者の知るところとなった。議員を続けるべきか思い悩んだが、二〇年、三〇年と透析を受けている人がいるのを知り、議員活動を続けようと改めて決意し、今年の四月四日から透析をはじめた。午前中三時間の透析なので、午後と夕方以降は活動できるし、頭もそれなりに回転している。

頭の回転を維持するには人と対話することが重要で、月に一度の友人との会食会は貴重な場だ。今年六月に「古稀」を迎え、喜ぶべきか、悲しむべきか複雑なおもいだったが、中学時代の



同級生で恩師の名を掲げた「勇吉会」と称する毎月一回の会食会の場で祝ってくれた。十数人の仲間だから毎月誰かの誕生日がある。

会は農業者、商工業者、年金生活者、主婦などの集まりだが、会食会はきまっていつしか政治談義に発展する。誰しも政治への不信と、この国の行く末に不安を抱いている。高齢となった身が懸念しているのだから青壮年にとってはただならぬ思いが推察できる。私は民主党支部代表も担っているため労働組合などの各種集會に招かれるが、いつも挨拶の内容に苦慮する。党支部代表という立場上、政権を擁護し政策への理解を求める話をするが、しかし政治不信を払拭する言い方は、

弁解にすぎないと思知らされる。

政権を支える与党民主党内から重要法案に反対票を投じることは、党人としてあるまじき行為だ。国会提案までの間、党内論議を経て結論をだし、衆参ねじれ状態の国会を突破するには他政党との合意は必要である。

「消費税を上げる前にやる必要がある」というが、反対票を投じた国会議員から具体的な提案を耳にしたことがない。単にスローガンのように、消費税を上げるまえにやる必要がある、と言うだけでは一般論に過ぎず、ましてやマニフェスト回帰論は財源の伴わない議論だ。党内討議を通して具体的な提案もなく法案に反対し、そして集団離党というのは残念な結果だ。

政党とは何か、党人とは何かを改めて考えさせられた。小異を捨て大同につくのが政党組織ではないのか。もつとも、党綱領のない民主党ゆえに、政権交代が最大目的だったゆえに、党の分裂は当然の帰結かもしれない。青年時代の社会党が懐かしい。いまの政治状況で解散総選挙となれば、民主党政権は崩壊すると危機感を感じているの

は私だけではないだろう。マスコミで報じられる中央政界の動きでは、地域での活動に自信が持てなくなる。

わずか十数人の「勇吉会」でのとりとめの話のなかかでも考えさせられることがある。そして一〇月には小樽市で高等学校の同期会があり、旧交を温めるなかからも厳しい意見が飛び交うと思う。そしてまた刺激を受け、発奮させられる。

頭脳の退化を防止するために講演会や学習会などに出席するようにし、古稀に抵抗の意味もあつて、学ぶ意欲をなくさないようにと自覚している。透析によって、日々の生活や活動が制限されることもあるが、議員活動はもとより、町内自治会活動、長年取り組んできた地域の合唱活動等々、貴重な時間を有効に活用する大切さをますます実感している。

私的な近況報告になってしまった。本誌に連載した道内まちづくりルポの「自治研デス。おじゃまします」の編集に携わったのも、いまでは思い出深い経験になった。

へかんだ かずお・オホーツク管内斜里町議会議員